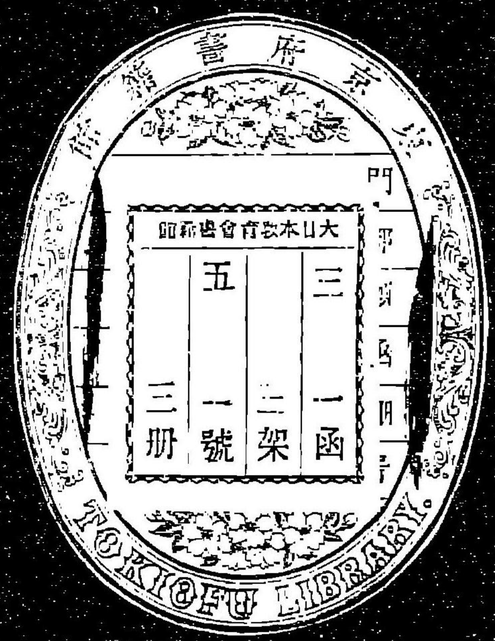
芳香餘談 二葉迺風

特38
641
共三本



東京帝國大學圖書之印

芳香餘談 二葉廼風卷之二

東京　瓜生政和編集

○松平竹千代のはなし

徳川家康幼名を竹千代と云ふ曾て今川義元の居城駿府中にあり天文二十年五月五日近郷の童子ら寄集り阿部河の河原に於て石打の合戦あり蓋その石打の戦ひは當夏のみに有らず毎年

此日を以て是と為すと例とする故見物のりの輩まだきより群集なす然わんば竹千代も石歩の戦ひと見んと僕を脊負て河原へ往しを今や石歩始もらん景勢あて一隊の童子い人数三百人一隊の童子い人数百五十人左右を立てれ陣をけを見物の者まる争ひて多勢の童子の方を着く爰を於て竹千代と負る僕も之を往んと為ると竹千代止めて我い寡き人数の方をもらんと言ひ

れで僕怪しんで其故と問ふ竹千代答へ大勢子供い自ら大勢と恃をふるの心あり小勢の子供い自ら小勢なると知る大勢と恃む心怠り小勢を知ると心必死なり用りて我い必死なる方を着くと此童子戦争小勢なる勝と取り果しく其言辞の如し竹千代時を十歳義元これと聴き所謂大将の門を大将と出すの譬へを違いずと言し

となん弘治二年竹千代十六歳元服して次郎三郎

元信と名のり又改めて藏人元康と号す永禄二年今川義元上洛みんとす織田信長之を防き鷲津丸根大高沓掛鳴海梅坪寺部の諸城を築き兵を分て守らしむ信長の兵義元の兵に比較れば十分の一なりと雖抵抗がたきを計り鳴海大高沓掛の城将なる義元に降る爰に於て義元我が旗下の大将を以て是を守らしむ鵜殿長持が籠る大高の城兵糧乏しきを告来りければ義元

藏人元康として大高の城へ兵糧を納さしめんとす然れども城の左右なる敵城なる織田方の将卒充満たれば衆人なるあの役を以て甚だ困難なりとなん元康時に歳十八兵士一千騎を将ひ兵糧を護りて往るに信長鳴海に陣を元康とれを防き其臣鳥井信吉杉浦勝吉を以て之を候ひ視せしむ両士帰り来り鳥井信吉云へ敵兵我が勢を見て邀へ戦ん杉浦勝吉云へ彼ら我が兵を邀

へんと思ふ山と下るべし
然るに猶山上に陣をすゑ
戰ひを好まざるものなりんと
元康勝吉が論を宜しとし
信長の本陣ハ千挺捨並
寺部梅坪鷲津丸根の
四城を欺んと兵士二百を
分ち寺部の城梅坪の城

に向はせ是ぞ城下近くの村家に火を放せけるを
煙りの上りと見て寺部梅坪の城中にも敵寄せ来
れりと急に防禦の用意を為し鷲津丸根の城兵の
寺部梅坪を援んと火の手を望んで馳向ふ元康
の旗障に麾下の兵士八百を三隊に分ち兵糧を護
衛して難なく大高の城に繰入れ兵を收め徐々と還
る信長とれを見れども松平勢の陣列整然たるを
憚り敢て戰ひを向ざりしとかや翌三年五月今川義元

駿遠三の勢四万余人と特ひて織田信長と攻て池鯉
鮒の驛ふ多り兵と分ち諸城ふ多り松平元康として
丸根の城と攻しむ是ふよりて元康丸根へ向ふ城兵
先と爭ひ出て戦ふ元康ちの体と見て以為敵兵我が
勢ふ比較まで寡多り然ると僅の小城ふ便りて
守らんと為ふ皆これ必死なる者多り如ず鉄丸を
さけ械ふ多りてこれと抜んみんと故ふ始め弓鉄炮
を以て應ず既ふして先鋒の人々戦ひ酣ふなるふ

けるを急ふ麾下の勢と進めて撃かり遂ふ城将佐久
間盛重と斬りて丸根の城と落陷さりちの時今川方の
大将朝比奈泰能も鷲津の城を抜き義元傾
ふ諸城と攻多り扨深く進まんと為り大高の城を
敵と支ゆるの要所なるを智勇絶倫の人ふあらずんとを
守らせ難し誰とぐ此處ふ至んやと向ひけるを左右の
諸大将ちる多ふ松平藏人佐ぐと同りて義元元康
を大高の城と守らしゆ自身諸軍と進めて桶

峡に本陣を居らり信長雨降り風荒き時に乗じて潛
かに間道より兵を廻らし来りて襲ひ撃つ義元頻り
に勝利すると以て心奢り徒と設けず在りけるべ防ぎ戦
へども敵いず遂に此処に討れぬ其旗下の諸大将
その凶變を聞と齊しく皆悉く敗走す故に大高の城
中も駿河より来る兵士い我先にと落失て今い松平の
手勢のみとなりぬ因りて其旗下の将士等元康を諫め
て云ふ義元公すでに討れぬ今いらの協と誰が為ぞ

守らん若ず軍を全うして本国へ帰らんにしかと元康云ふ実
に然り然り其実證を判然に得て後に兵を班す
べし急ぎ狼狽城を出て走りて幸に少伴への
謬りなくば天下の人の物笑ひとなんと此時水野信元
川谷の城にあり私に使ひを送りて云ひ来る信長既
に義元を討取りぬ諸城を復せんが為に兵を向んと
宜しく今夜の中にその城を去るべしと元康云ふ水野氏い
我が縁者なりと雖も當時織田方の旗下の一将なり此

告あるもいまだ輕々しく信ぜざるぞと則人をつかはして実否を正すに其者帰り報じて曰の義元公の討死信ずべき爰に於て衆人こぞ爭つて早く軍を還さんことを勸むれども元康ゆうぜんとして我兵土地に馴ざるの故暗に乗じて夜件々恐らくの道に迷ん宜敷月の出づるを俟て城を発すべし若し夫まで彼兵と向け攻来らば我是と戦ふんのみ漸ふして月稍とくるを差昇りければ則ち兵を整へ列を正して徐々と城を出で三河を指

て引退く是を見て土着の敵兵ら行きぐふ群ぐち道を遮ぎり討んとす本多百助多く戦ひて之を破り遂に三刀令村に至り亟に岡崎の城に入んとるに元康その將士を止めて曰ふ此地我が家從来の居城なれ雖も義元に預け義元ぐ我に還

すの言辞うゝ然ると今その死するの時ゐ者でて之を[illegible]
不義なりと則ち総軍を将いて大樹寺ゐ陣し此処ゐ止る
と三日駿河の将卒らゝゐ信長の攻来らんとを忽れ城と
棄て遁去り一人も止る者なし爰ゐ於て元康ゐ彼ら弁
て居らぐ故ゐ我是と取る可しからんと永禄三年五
月二十三日遂ゐ岡崎の城ゐ入る時ゐ元康十九歳後家
康と改名す徳川幕府の大祖東照大神すなわち是
なり

○北條氏康のはなし

北條氏康歳十六ゐて父氏綱死し其家跡を継ぐ此
時上杉憲政の臣本間氏井俣氏なる者罪を憲政ゐ
得て禄を放る爰ゐおいて憲政の重臣長尾意玄私
ゐ本間井俣を招ぎ足下ら今君の為ゐ罪を得て
職禄を召揚らるゝとて僥倖早く小田原ゐ赴
き伴って北條氏ゐ仕へ彼が強弱得失を探り来ら
べしと言ひて二人喜んで是と請諾忍んでゐ田原

ふ多り矛目氏と頻をて之人憲政暗弱ゐして忠臣と疎んド佞人と近づく臣らまして事なきふ罪せらるゝふ及ぶ

所の如くなるむ縱令申し立免しと得るも仕へんと思へず願くハ當君公ふ為めて犬馬の労と致さんと多目氏半ハ疑ひ半ハ信ド先ッ是と推挙して氏康の徒士と為て家ふ於て両士小田原ふ居るを一年除籍く北條氏の得失と探り得て後二人齊しく氏処と逃去り長尾意玄が許ふ来り告て言ふ臣ら両人熟氏

康が人となりと見るふ歳いまと十六の弱輩といへども智勇剛柔兼ねたり時らに書と讀を時らに劍術槍と試を能禮義と守ると常とすべ威自然重く然れども下賤の者ふ對すると是と辱らしめず士と用ゆると老人と幼少と皆各の器量ふ隨つて使ふ仮令ばその家の家督と継ぐ者ふ非ざる時ハ俸金と与へ用ゐ充て功有べ之と進むると嫡嗣と変うなり故ふ旗下の者上と畏ると能止ふ

服す爰を以て自ら奮發して君の為に死を致さんと願ふ族多し初めは上杉氏の將士皆ひそかに吳と好を通じ吳多く兵九人の早雲死するに臨み遺言して両上杉氏の比ぶるに我家三世の怨みあるに則ち今の氏康に當り実に仇讐たるべき者なりと

早雲の小田原北條氏の祖にして始めは伊勢新九郎長氏と云ふ長氏嘗て一の儒者を招きて黄石公

の三略の巻を説しめ其首に主將の法務て英雄の心を攬しむるに有りと言ふ吾既に是を得たりて後を讀んと止めんとなんぞ初めは長氏伊勢に在りて頻りに財を散じ豪傑を勉めて是を好を結べり一日長氏衆人を會して云ふ今天下久く乱れ名を揚げ家を興すべきの時なり関東八州の地勢肥豊に土強く馬多し因りて往古より武を用ゐるの地と称す然るに永享年間より以来未だ定まる主な

苟ぞ是を據らば天下とも圖ツベし故に諸君と共に東へ
機に隨ひ変に應ト事を謀らんと思ふ諸君の心
如何ぞやと衆雄奮発して
是に從ふ爰に於て文明八
年伊勢長氏は荒木兵庫
多目權平山中才四郎荒木

又四郎大道寺太郎有竹兵衛ら六人を伴ひ伊勢を発
て東國に下る
一書に長氏ら六士と將ひて関東へ下らんと遠江の
国小夜の中山へかゝる時に賊大勢息に起つ
前後と遮ぎり路用の金銀と携へ一包を奪ひ
刀剣とを浚せと云へ荒木以下の六士怒りて是を
殘らん長氏推し止め山賊の色ひが隨意よへ
けとが絨に散ずて往へと爰に於て長氏自

已の朐と指して山賊なり律義なり我が狗中の関八刄と奪へずと是と笑ひ各一笑して氏山と越しとなん

彩て長氏の駿河を今川義忠が婚ると以て之を用り延徳三年今川氏の兵と借り足利茶茶丸が不義と討て伊豆の国と平定し韮山の城主となる氏時氏と北條と改む明應四年九月長氏獣畜猟を事よせて大森藤頼と追ひ走し相刄小田原の城とえらし威勢ようやく震ひ其子氏綱を盛大

ふ為りむき氏綱の子氏康を及びて既に三代なり氏康幼若なりと又ども実に本間井俣が説ところの如く威權ますます張り上杉憲政の領地日々に減ト兵力月々に衰へなり時に今川氏親憲政と約を結び兵と起し北條氏と東西より挾み攻んとなし氏親先ず北條の一将が籠る駿刄長窪の城と圍む氏康兵と吹き自身兵と引いて長窪と援んとなる時に河越より駐進きなり両上杉の兵士合併し来り

當城を圍んとすると告げ氏康長窪とおきて先ッ河越
に至しに上杉の兵風説のみにて来らず爰に於て氏康
諸將と議して河越の両上杉と領地を爭ふの要所
一騎將として之を守らんと思ふ誰か其任に當らんや
と諸大將爰に北條綱成出でべしと
綱成の旗の黄色にして八幡の二字を書き號して
戰ひのぞむ毎に敵陣に突入り進退自在勇猛強勢
にして尚ふ勝ずと云なし故に時に當つて黄八幡
の名関八州に響へり
爰に於て氏康綱成に三千の兵を授け河越の城を守
らせ直ちに長窪に往て援んと欲る氏親も圍を解
て歸る遷移して天文十四年上杉憲政上杉朝定
と合併し両家の軍勢大挙して来つて此度は是非とも小田
原を伐亡さんと先ッ河越に城を囲むと數十重に
して偏に是を拔んとして攻撃て甚だ急なり然れども強剛
固守して敢て撓まず時に足利晴氏も大軍を將ひ来

つて憲政朝定と援く是ゐ同りて両上杉の兵威まんを盛んゐ大軍日夜年と越て攻まども城将細成防禦厳重みして抜ずらず寄手四方と塞ぎ兵糧の乏と絶つ氏康是と愛き吾かゝるこゝ往て救ふべし然れども城兵ら我が至ると聞ずして死と決まるとあらやせんと多る誰ろ能往て我計策と綱成ゐ告んやと言ければ綱成の牙辨千代歳十八後つて氏康の後方ゐ在りしが進を出て請て云ふ臣願くは氏使ひと為ん乞実ゐ當然なる若し事成ずして

敵の為ゐ捕れ拷問ゐかゝり骨と砕き肉を醢ゐさるるゐ敢て言ずと氏康これと許し辨千代ゐ諭すやう汝往き善兄ゐ話すべし吾両上杉の兵と破らんと迚きゐ有まず只能堅固ゐ城と守り出て戦ひ死と決すると勿れと辨千代拝諾してすなわち往竊ゐ上杉氏の符號と奪つて鎧ゐ着び敵と欺いて只一騎猛く城中ゐ入り兄綱成ゐ面會なり氏康の言と以て傳えけるに又一倍の勇氣を増し銃城まんを堅固なる氏陸ゐ當つて氏康の旗下の将士

諸城と守る領地の境ひと固めたまで小田原に在るものを八千除人と引卒し自身と打ち将として河越と赤し出張す河越城の寄手の上杉憲政上杉朝定足利晴氏の三将その勢八万除人なり氏康敵として驕りと起さるわ我の怠りと伐んと計り伴つて憲政らに和睦と結ん憲政朝定しきりあくて聴ず氏康陣と進み入る川の南の岸まで出づる両上杉の兵来り迎へて戦んん氏康鋒を接へざるに逃走る小田原に入り竊に諜者と出して敵陣の模様と窺むる諜者

帰りて告ぐ両上杉足利らの兵士笑つて云ふ小児逃るに疾くして走る氏康これと聞き甚だ有らず微笑して四五日再度兵と出して入間河の南に上杉足利の兵迎へに来る氏康戦へずして又走り此度は道に止まり諜者と出して敵の様子と探らしむる帰りて告ぐ彼の将士言ふ小児の兵と出すと能く兵と出せば必ず逃る仮令奮発して出来るも何ぞ宜しく捨て置べし氏康聞て陣来りて其夜亜に兵

と齊へ親を誓て曰く吾嘗て戦ひの道に兵衆きも必ず勝べきにあらず人数寡きも果して敗るの定なし兵よく和し上能睦むや否やを顧るのみ古往より小敵を怯れ大敵に勇むの例多し吾父と共に数回上杉の兵と戦へども戦ふ毎に味方一人を以て敵の十人に当る多し小勢のよく大勢に敵するを今日始て非ず両上杉足利の人と勝敗を決すること一戦にあり将士一心に一力を協へて唯吾命に所に従ひ来れと又総軍に令して白布を以て

鎧の上に掛け結べせて自らざる者に遇せすなわち斬る其首を刈ると勿れと爰に於て偽へと定め列を正して兵を操出し竊に河を渡し夜半なんと為る時直に上杉足利の陣営へ衝て入る両上杉足利の将卒ら大いに狼狽混乱なり故職動鼎の沸ぐ氏康の兵これに機を得て縱横に走まわり或ひは斬り又は突き一人を以て百人に当り敵を討ること二万除人朝定を虜にし晴氏憲政を走らせ関八州の豪傑その夜すなわち氏康に降る

九千除入時ハ天文十五年四月二十日の事ハ氏康年十九是と河越合戦ハ後年氏康武田信玄と會して酒宴とせ折信玄氏康ハ河越合戦の謀計と向ひ氏康ハ吾ガ功績ハ全く綱成らが忠勇の致すこゝろ氏康謙遜して矜らざるの如し

永録五年五月氏康の子氏政歳十七武田信玄と共ハ兵と會して太田資正ガ屬城武蔵松山を圍ム時ハ農夫の麦と苅馬ハ附て陣所の傍を過るあり氏政指して左右ハ問ハ賀せの何なるぞト左右の者麦なるよと答ふ氏政ハ是を炊で晴信公ハ供すべート信玄ハ哂つて吾今ハ北條氏の領

地の大いなると為る郎君の実に大必の公子なり故に是
らの言辞あり夫麦の刈て後に是と乾し是と扱れ
と撃ち水に浸して春き日に晞し水に浸して春き
両三度而して後に炊ぎこれと食べ然る今郎君
の恵にこれと炊ぐせんと思ひうのみと左右に侍らし者皆
竊に氏改ぐ下の情に通ぜざる哉笑ひしとなん

爰に一ツのお伽話あり或富家の息子食あり玉
と炊ぎ身に錦繡と纏ふも猶これと足らずと

常に不足のを抱きけるゲ湖江上の車も懶し今日の
些閑静の景色と求めて楽しまんかと思ひ一人朝
より山へ往きたるに計らず道と躇迷ひ奥深き足
草臥て帰らんと為れども蔡へ出ず峯と越え谷
と渡り猶径めぐりて半日餘り服すべく飢餓と
あゲ人歩行もまぐしくに進まぐらうう時に水清
く山潔よく傍に草と結びる庵あり心嬉しく
家へ住て居るに老翁一人うちに居もり故に山路に

踏迷ひ阬陵る者のよーふて老翁ふ食と求りけ
れば翁ハ立出で开ハ元の毒うる事なく人間の食
すべき物ハ伝もあ一ず共ども暫時歩るゞ一服
とまらせんと以て彼の息子ハ椽の端ふ腰と
かけう老翁ハ立いで何処よりう五六人の童子成
連来り是ふ言ひけ或ひハ岩の穴より鑛の鋏と拵
出させ鍬鎌の刃となーふ又ハ林の木竹を伐りて長ば
柄ゑと作り農具一ト通りと拵へ垂夫より種
の土と起ー田と堀り水と湛へ籾と漬種と蒔苗代と
なー苗生長ば田植と成て田植終りて草と取ると三四度
稲やうやく実と結べば鳴子と張り鳥を追ひ熟まるとえて
是と苅揚げ物ふ截て乾ー穂と扱き碓臼ふて籾摺と
なー玄米とうりうると又搗て白米とうんるゞ実ふ四十
八度の多数の世話しさ粒ゝ辛苦と云ひーも道理
なりと思ひて傍らと見わを畑を起ー大根種とまた
是ふ糞となー芽出れば疎抜勢き葉と撰と殘

折々培植ねどときと挾て抜き土を洗ひ縄ふ結び
木ふ掛て乾し霜除のむしろふ朝夕の手数と掛せ
まゝ大きなる搭と拵へ傍らふ搗揚げる米の糠を
持来りて大根と澤菴ふ漬んとする様子ふ塩ハ如
何と思ふうち谷川の流れゝ海となり濱辺へ急
ふ塩竈と築き塩汲桶とうゝ汀へ寄る潮と汲きま
れと水際の洲へ日ふ晒して其沙と掻集ふ是
と漉桶の上へ盛り盆りる沙の上へまゝ塩水と汲で

来て歩かけ下の桶へ溜り潮を竈ふ入まて煮つゆ
ゝ塩と成りさまを汁塩を彼の糠ふ雑ぜるる大
根と澤菴ふ漬るこゝふ米と炊ぎ阪と焚き既
ふして出来上りけまべ飯と木の葉ふ盛り澤菴
と石ふ乗て出しゝ爰ふ於て彼の息子思ひけゝ
我平常この足ふ夫ハ味悪し是ハ美味ゝ
或ハ塩甘し又ハ鹹しなど言て贅澤の限り成
並べられど今眼前ふこの手数この困苦と経く

澤菴の香の物と阪とと云るのを然して扨盛べき椀
もなく居べき膳も無し我冨る家ハ生るまべ米ハ
人の骨折ハて田すり取るの澤菴ハ塩と糠ハて大
根を漬るもの糠ハ米の糟塩ハ海の水の塊なるとの
思ひ唯何ぞも上の空ハて米を云るとき粒々辛苦
なるど口ハハ云へど心ハ其の辛苦とあまんぜざるべ貧
賤の人の情ハ通ずるを能ハぞ貧賤の情ハ通ぜざれ
ば驕慢の意ハ起ぬ何事ハも偏頗

旅僧小田原の
高札を見る

ありて佞人を用ゐ佞人を用ゐ
ハば其家亡びざるを我今
の飯を食ひ香の物を見
るハ知るものと想像を発
明なりと言へなん
北條氏の政氏政ハ
やうやく弊を生じ老臣松田
憲秀らハ権を専らするハ

閑り士民ハ害と蒙るもの甚ゞ多し爰ハ一人の旅僧あり小田原の城の大手の前と過んとして高札を見て居人北條氏まさこれハ比びんとすと傍の者これを呼き走ッて市と護る役人ハ告ぐ役人僧と呼びて問て云ハ汝北條氏と云て将ハ比びんとすこと云るよ其事信なりやと僧答へて云ハ信なり役人云ハ何の故と以て是と云る僧云ハ吾三十年前ハ此の地と過しときハ高札の掟書ハ四五ヶ條なり然るハ今まハ三倍す

往昔の例と見るハ君ハ徳薄けれとも則政事滞る政事滞とれば則ち令煩へ令煩へけれとも則衆くの人離る衆くの人離るれば則君ハ者孤立ス り君孤立ハて以ゝ者なしと役人ハ訳と以て氏政ハ告ぐ氏政これと意ハ止ず終ハ滅亡するハ 惟ハ深く警めざらんや

○太田持資のはなし

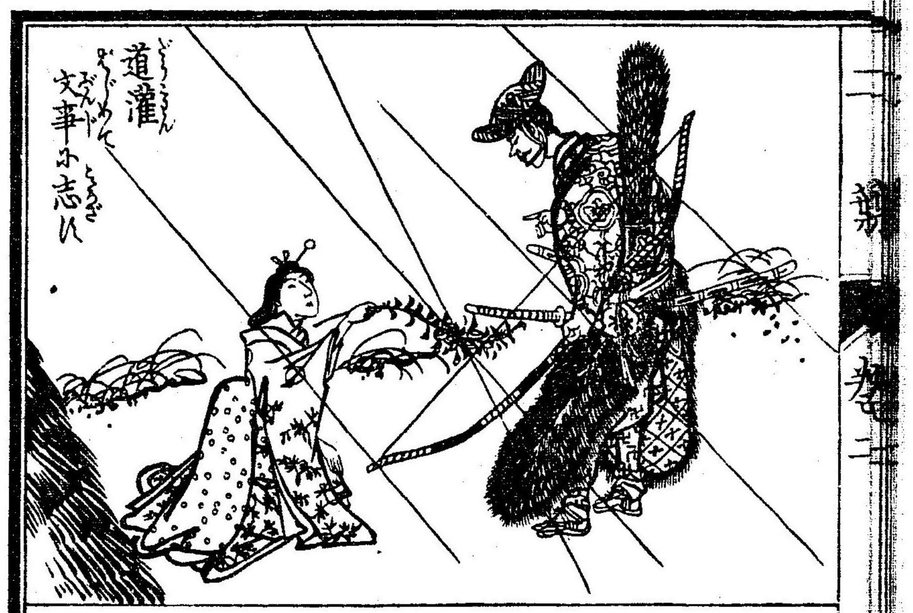
持資後薙髪して道灌と又扇谷上杉定正の臣太田

道真の子なり、幼雅より才智すぐれ心まさし剛歳十三にして
初めて軍陣に臨み山内上杉顕定が属城武蔵蟹名川
在ふ机に向かうて「手習ハ先ふ机をそろへ」といろは
にほへと散らしなせ」と口ずさみ忽地その城を落陷しと
なん

その事往々書中に見えたれど亦他書と按ずるに
道灌幼雅より剛氣洁斉にして文を学ぶことを
好まず常に田野に馳走りて鷹を放ち山林に経へ
廻りて獣畜を追ふなど唯田猟をすることを以て事とせり
一日道灌例の如く持を携へて遠く野に出でしに五
月雨俄に降出でたれど蓑笠等の用意なきの傍の
家に独入り雨具を借りんとを請けるに家主の他に出
て妻のみ有りしが其婦花美しき歎冬の枝を持ち
来りて道灌の前に置きしに道灌婦の心を悟ると能
いさぎよしとに答うるの言辞なく直ちに家を走出
で隣なる家に往き雨具を借り得て家に帰り

然れども歌冬の花の意なれ解しがたけれを博識る人
に戦の女が歌冬の花一枝を以て雨具と借んと請
ふ謝せい何の歌ぞと問ひしに其人の開いた紙の
女が蓑笠なりと云ふと謝せるの謎言辞みして古哥ふ
「七重八重花は咲ども山吹のみの一つだに無ぞ哀し」
この心なりと答ふ於てやうや其意を解し道灌大息し
て云ふ憶丈夫なりの文学を知ずは且和哥とも能せ
ずんば有べからざる戦しき農家の乙女の為ふまぐ

愧を蒙ること多しと思ひして田猟ふ出ることを禁じ
日夜勉強困苦して書を筴を手習を為し和哥
を学びしとあるを思へば十三歳の初陣ふ小机の
城攻しくふ詩ふ道灌軍慮ふ勝れ且和哥ふ名
誉るをもって小机の初陣へ詩の口ずさみを附會する
ものなれんか道灌素より城を築くことふ精しく
江戸の城河越の城その外東ふ道灌の縄張
せし城築きたるなり道灌武刄松山の



城と築きしに城の東の門ヲ一ツの簡を掛け是ヲ書して云へる城の縄張ヲ惡しきと見出して難ずるものあらば重き褒賞を以てあるを謝せん然れども恐らくハ其爾ることを指して難ずるを能わと

時ヲ一の旅人あり城の模様を仰ぎ見て云へるの縄張實ヲ善し然りとへども城の土手の上へ尽く松を植えるハ拙し松ハ絶ず風を含んで颯々の響きを添ゆ問牒を入るヲ便りあるものなり古の周圍の松を植ざるを宜けとも道灌と云へる大いヲ驚き人として旅人の後を追ハしめに遂ヲの旅人の往ところを知らず時の人の旅人として神人なりと言ひしなん

○吉川元春のこと

元春の毛利元就の二子なり後ふ治部少輔と称す性質豪爽みして善く兵を用ゐ故ふ人呼んで吉川小早川と毛利の両川と云ふ元春年十八にまで妻を娶らず父元就その臣兒玉就忠をして思ふところの乙女を有りやと問ひしむるに元春云ふ吾豫て熊谷信直が女を迎へんと思ふと就忠驚きて云ふ所の郎君の何とか冥諫うる信直の女の人の称うる醜女な

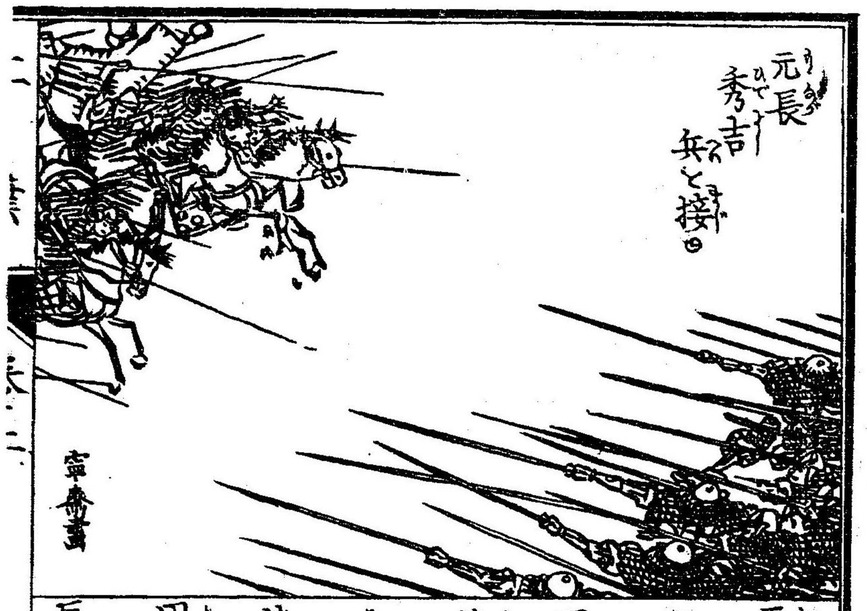
ふよう娶んと言ひのなり然ると君今是を迎へんことを望まるの醜と美きの差ひなん迂闊ふ事と做さば悔あらんと元春哂て云ふ吾もとより信直が女の醜顔なると知ると以て迎へんと思ふぞ往古の名将美女を愛しその色ふ溺れ勇を失ひ慮りを害ふりのたまふと多し然れども世の人皆顔の美なるを害有るも事ふ益なきと称うなり醜きを悪んで取らば吾是を去して獨り勇を失ひ智を暗まんとと

なるものなれば世の人捨て取らざると我をんぐ
是と多くが信直かるらず感ト喜び味方の為に死力
と出し働くべし今との迫出る将卒の中にて孰か信
直が武勇の右に出るものあらん吾信直と鉾先を聯
べて父が戦場に多くの魁けと先きび向ふところ摧き破
らんと多くを多くべしと就忠是を賞き且愧ぢ且猥し
くものとて元就に告ぐ元就ま宜しとして許しけるを
元春遂に信直が女と娶らるに信直果して大いに

喜び戦場に向ふ毎に死力をして働きける故毛利氏の
軍威これより倍四方に震ふ

元春醜婦と娶るその父信直として服さ令んとの
に有らざるその親しらるる孕し故に元長元氏廣家
らの子と産し皆りて英雄なり天正六年六月織田
信長羽柴秀吉として中國を侵し来る毛利輝元
美作出雲の兵と出し是と防ぎ両軍相迫つて然
川に戦ふ時に秀吉の兵二万騎吉川元長その弟

元氏廣家の兵一万人双方流れに乱れ入りて
逆ひ戦ふ然るに秀吉の軍の騎馬多きを以て直ふ
馳て突き来る元長の兵の徒歩なるに周り皆ナビく
凌ぐ時に元長令して言ふ様晩けと爰に於て兵士
一様に折しき錦と構えて待つ秀吉の兵進むと雖
ども遠巡して退く元長是を見て令して引起と爰
に於て兵士起て進む秀吉の騎馬隊も走入
らんとするを元長令して折敷む列の如くする



再三再四秀吉が勢次第に
押すから引退くこと二十
四丁の時秀吉が後備へに
荒木村重あり元長が援軍
に浮田直家加へて然れども
荒木秀吉と救ひ来らず浮
田と元長と援けずして元
長の兵深く秀吉の兵と押つ

あくまで猶相對して侍へと乱さるゝを退んと甚だ難し
時に天野隆重手勢と引て高き岡に登つて元長
の應援に侍へ元長これに周り隊と緩り徐々と還る
秀吉元長が武畧の盛んなると見て容易に爭ふ可
からずと知り信長に援ひと求めしとぞ